

Ⅱ 平成10年の病害虫の発生状況

1 病害虫の発生経過概要及び発生原因解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
水稲	苗立枯病	並	並	平年並の発生であった		・ベノミル・TPN剤、ヒドロキシソキサゾール剤による防除
	葉いもち	早期 やや早	やや少	5月5半旬から発生が見られ、6月下旬以降やや増加し、一部で「ずりこみ」をおこしたが、全般にやや少ない発生であった。	・6月の多雨 ・7月上～中旬の少雨	・トリクラゾール剤による箱施薬 ・本田でのIBP剤、プロヘナゾール剤、ヒロキロン剤による防除
		普通期 やや遅	やや少	7月1半旬から発生が見られ、7月下旬にかけて増加したが8月以降新たな発生は少なく、上位葉での発生もほとんどなかった。	・7月上～中旬の少雨 ・7月下旬の多雨	
	穂いもち	早期 並	少	全般に少ない発生であった。	・葉いもちの発生が少なかった。	・出穂前のIBP剤、ヒロキロン剤による散布
		普通期 並	少	8月下旬に認めたが、全般に少ない発生であった。	・8月以降の少雨	・出穂時のフェルモン・フサライド剤、EDDP剤による防除
	紋枯病	早期 並	並	6月5半旬に発生を認めた。7月上旬以降増加したが、全般に平年並の発生であった。	・6～8月の高温	・バリダマイシン剤、ジクロメチン剤、ベンジクロン剤による防除
		普通期 やや早	やや多	7月1半旬から発生を認めた。7月下旬以降発生が増加し、9月下旬には平年よりやや多い発生となった。	・6～9月の高温 ・7月下旬の多雨	
	白菜枯病	やや早	並	8月上旬に発生を認めた。全般に平年並の発生であった。	・7月下旬の多雨	・テクロクテム剤による防除
	ばか苗病	並	並	本田における発生は平年並の発生であった。	・種子消毒の不徹底	・DMT剤による種子消毒
	ツマグロヨコバイ	やや早	やや多	全般に平年よりやや多い発生であった。	・暖冬 ・4月以降の高温	・イミダクロプリド剤による箱施薬
	萎縮病	並	少	本田における発生は少なかった。	・保母率は0% (5月採集) であった。	
	ヒメビウカ	並	並	越冬虫、第1世代虫の発生量はやや多かったが、その後減少し平年並の発生となった。	・暖冬	・イミダクロプリド剤、フィプロニル剤による防除
	編葉枯病	並	並	6月4半旬に発生を認めた。全般に発生は平年並であった。	・保母率は1.5% (5月採集) であった。	
	セジロウカ	やや早	やや少	4月5半旬に飛来を確認した。6月3半旬、4～5半旬に飛来があったが、その後の飛来は少なかった。水田内での発生はやや少なかった。	・箱施薬剤の徹底	・イミダクロプリド剤、フィプロニル剤による防除 ・コノマイカとの同時防除
	トビロウカ	早	やや多	6月3半旬に飛来を確認した。6月3半旬、4～5半旬にやや多い飛来があったが、その後の飛来は少なかった。早期水稲では、8月下旬、普通期水稲では、9月上旬以降一部で「坪枯れ」が見られた。	・飛来時期が早かった ・一部で防除時期が遅れた。	
	コノマイカ	やや早	並	6月1半旬に飛来を確認した。6月3半旬、4～5半旬にやや多い飛来があったが、その後の飛来は少なかった。第1世代の発蛾期は7月4～6半旬、第2世代は連続的であった。食害程度は圃場により差が見られたが、平年並の発生であった。		・カルタフ剤、イソキサチオン剤、テブフェンチド剤による防除
麦類	イネミスゾウムシ	早	並	4月6半旬から発生を認め、移植直後の本田への侵入は多かったが、平年並の発生であった。	・暖冬 ・箱施薬剤の徹底	・イミダクロプリド剤、ベンフラカルブ剤による箱施薬
	イネクハムシ	並	やや多	6月上旬から県北、島しょ部の一部で見られた。全般にやや多の発生であった。	・暖冬 ・近年やや増加傾向にある	・MPP剤による防除
	斑点米カメシ類	早	多	休耕田や畦畔雑草地での発生量が多かった。特にアカスジメクラガメの発生が目立った。	・休耕田の増加 ・暖冬	・エトフェンプロックス剤、MPP剤、MEP剤、シラフルオフェン剤による防除
	スクミリンゴカイ	並	並	6月の降雨で冠水した圃場でやや被害が見られたが、並の発生であった。	・冠水による用水路からの侵入	・捕獲 ・IBP剤による防除
	さび病類	並	やや少	5月上旬に小麥で赤さび病の発生を認めた。その後、県南、島しょ部の一部で発生がやや増加したが、全体として平年並の発生であった。大麥、裸麥では発生を認めなかった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	うどんこ病	並	並	3月下旬に小麦、裸麦で発生を認めた。小麦では、県南、島しょ部で多発したが、全般に平年並の発生であった。 裸麦では発生が少なく、大麦では発生を認めなかった。		・チオファネートメチル剤による防除
	赤かび病	やや早	多	裸麦では3月下旬に、大麦、小麦では4月下旬に発生を認め、全体として多の発生であった。	・開花期から乳熟期にかけての多雨	
ばれいしょ	葉巻病	春作：並	春作：やや少 秋作：並	春作：4月上旬から品種デジマを主体に発生した。 秋作：11月下旬に発生を確認した。	・アブラムシの発生が少なかった。	・種いもの更新 ・アブラムシの防除
	モザイク病	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：4月下旬から品種ニシユタカを主体に発生した。 秋作：10月下旬から発生を確認した。		・種いもの更新 ・アブラムシの防除
	疫病	春作：やや早	春作：多 秋作：並	春作：平年よりやや早く4月10日に初発を認めた。その後、好適条件により拡大進展し多発した。 秋作：11月下旬に発生を確認した。	・4月の高温、多雨	・マンネブ、マンセブ、フェニルアマイト系、TPN剤等による散布
	腎枯病	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：5月下旬から発生した。 秋作：9月下旬から発生し、10～11月上旬に発生が増加した。	・4月の高温 ・9～10月の高温	・クロルピクリン、DD剤等による土壌消毒
	アブラムシ類	春作：やや早 秋作：並	春作：やや少 秋作：やや少	春作：平年よりやや早く3月下旬より発生したが、その後はやや少の発生で推移した。 秋作：9月下旬現在やや少の発生である。	・4月の多雨	・アセフェート、イタクトロリット、合成ピレスロイド系剤等による防除
	ニジュヤホシテントウ	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：やや少	春作：4月下旬から収穫期まで発生し、県北地域で発生が多かった。 秋作：10月下旬～11月に発生最盛期となったが、発生量は少なかった。		・アブラムシ類との同時防除
	ジャガイモガ	春作：やや遅 秋作：並	春作：やや少 秋作：やや多～並	春作：4月下旬から収穫期まで発生した。 秋作：9月下旬にはやや多の発生であったが、その後減少した。	・4月の多雨	・アブラムシ類との同時防除
	食葉性ヤガ類	春作：並 秋作：並	春作：やや少 秋作：多	春作：5月上旬から収穫期までヨトウガを主体に発生した。 秋作：9月下旬からシロイチモジヨトウとタバコガを主体に発生し、10～11月上旬に最盛期となった。	・4月の多雨 ・9～10月の高温	・アブラムシ類との同時防除
大豆	べと病	並	並	9月上旬に一部の圃場で発生を認めたが、全般に平年並の発生であった。		
	葉焼病	やや早	並	8月上旬に発生を認めたが、全般に平年並の発生であった。		
	ハスモンヨトウ	並	多	7月下旬から発生を認め、平年より多い発生となった。 9月下旬まで多の発生で推移したが、その後減少した。	・8～9月の少雨 ・9月中旬以降の高温	・イトフェンブ ロックス、アセフェート剤による防除
	鱗翅目幼虫類	並	やや多	7月下旬から発生を認めシロイチモジヨトウ、オオタバコガが主体で、平年よりやや多い発生であった。	・8～9月の少雨 ・9月中旬以降の高温	・ハスモンヨトウとの同時防除
	カメシ類	並	やや少	8月中旬から発生を認めたが、全般にやや少ない発生であった。		・MEP、イトフェンブ ロックス剤による防除
かんきつ	そうか病	並	やや多	春菜における初発は4月中旬と平年並であった。5月下旬から発生が増加し、平年よりやや多の発生となった。	・4～6月の多雨	・イミベンコナゾール、ジチアノン剤による発芽期の防除、フルアジナミ剤による灰色カビ病との同時防除
	かいよう病	やや遅	やや多	春菜における初発は5月上旬と遅かった。その後、増加しやや多い発生となった。 果実は6月上旬から発生し平年よりやや多い発生となった。	・4～6月の高温、多雨	・銅、ストレプトマイシン剤による防除
	黒点病	並	並	6月下旬から発生し平年並であった。	・6月の多雨	・枯れ枝の除去 ・ジチアノン剤、マンセブ、マンネブ剤による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	ヤノカイカラムシ	第1世代: 早 第2世代: やや早	並	1齢幼虫の初発時期は第1世代が5月上旬で平年より早かった。発生量は平年並で推移した。	・3~4月の高温	・冬期のマシン油乳剤による防除、6月中旬のブプロキシン剤による防除、DMTP剤による防除 ・寄生蜂の定着
	ミカンハダニ	並	多	春先の発生はやや早く、発生量は平年並に推移した。6月上旬以降は増加し平年より多い発生となったが、9月以降は減少した。	・樹勢低下が懸念されたため、マシン油乳剤の冬~春期の散布されていない圃場が多かった。 ・薬剤抵抗性ハダニの発生が増加している。 ・5月下旬、7月上旬、8月上旬の少雨	・冬期及び夏期のマシン油乳剤による防除 ・フルアジウム剤によるそうか病、灰色かび病との同時防除 ・8月下旬~9月のエトキサゾール、ミルベメクチン剤による防除
	チャノキイロアザミウマ	並	並	黄色粘着トラップ(諫早市)における誘殺は、4月6半旬から認め6月1半旬から増加した。平年並で推移した。	・5~6月の高温 ・7月上旬~中旬、8月の少雨	・アセフェート、イタダクロリト、マンゼブ、合成ピレスロイド系剤等による防除
	カメムシ類	早	並	2月中旬の越冬調査の結果、チャバネアオカメムシの1㎡当たり生息密度は、平年より少なかった。 8月中旬のスギ及びヒノキのきゅう果におけるカメムシ類の寄生数は、平年よりやや多かった。 予察灯(諫早市、西彼町)への飛来は4月3半旬から見られ誘殺量は4~5月は平年より多かったが、その後平年並で推移している。 圃への多飛来は局所的で山間地の極早生に見られた。	・昨年の発生量は少なく、越冬量も少なかった。	・ビフェントリン、フルバリネート剤等による防除
びわ	がんしゅ病	やや早	やや少	発生は平年よりやや少かった。	・越冬病斑量が少なかった。	・芽かき、せん定後の頂剤による防除
	灰斑病	並	葉 やや少 果実 多	発生はやや少なかった。収穫時に多発した。	・4月下旬~5月上旬の多雨	・春葉及び夏葉伸長後のチオファネートメチル、ベニミル剤による防除
	褐斑病	並	やや多	発生はやや多であった。	・越冬病斑量がやや多かった。	・春葉及び夏葉伸長後のチオファネートメチル、ベニミル剤による防除
	ナシヒメシロイ	やや早	やや多	フェロモントラップ(諫早市)による誘殺は、平年並であったが、被害はやや多であった。	・3~4月の高温	カルタップ剤による防除
なし	黒星病	早	多	初発は4月中旬と早かった。その後発生が増加し、平年より多い発生であった。	・4~6月の高温、多雨	DMI剤等による防除
	赤星病	並	並	初発は4月中旬と平年並であった。4月下旬の発生は並の発生であった。		
	うどんこ病	並	やや多	7月上旬より発生し、その後発生が増加し、平年よりやや多い発生であった。	・7月上旬~中旬、8月の少雨	
	ナシヒメシロイ	並	並	圃場での発生は平年並であった。フェロモントラップ(諫早市)による誘殺は、4月1半旬からみられたが、発生は平年並であった。		・合成ピレスロイド剤等による防除
	ハダニ類	並	やや多	6月下旬に発生し、8月上旬から増加し、平年より多い発生であった。	・8月上旬~中旬の少雨	・フェンピロキシメート剤等による防除
	カメムシ類	早	並	2月中旬の越冬調査の結果、チャバネアオカメムシの1㎡当たりの生息密度は、平年より少なかった。 予察灯への飛来は4月3半旬から見られたが、平年並であった。 飛来は並であった。	・越冬量が少なかった。	
	アブラムシ類	やや早	並	4月下旬から発生が増加したが、発生量は平年並であった。		・イタダクロリト剤等による防除
	ぶどう					
ぶどう	黒とう病	早	やや多	初発は4月中旬と早かった。5月下旬から増加し、6月には平年より多い発生となった。	・4~6月の多雨	・ジチアノ、マンゼブ剤等による防除
	べと病	早	やや多	6月上旬より発生が増加し、平年よりやや多い発生であった。	・6月の多雨	・マンゼブ、ネセチル、フェニルニルアミド系、モルフェライド系剤等による防除
	うどんこ病	並	少	7月上旬に発生が見られたが、平年より少なかった。	・4~6月の多雨	・燐剤等による防除
	チャノキイロアザミウマ	やや早	並	5~6月までは果房への被害は目立たず、平年並の発生であった。		・有機リン、合成ピレスロイド系剤等による防除
茶	炭疽病	早	やや多	5月下旬から急激に発生が増加し、平年よりやや多い発生であった。	・5~6月の高温、多雨	・DMI剤等による防除
	チャノコカクモンハマキ	やや早	やや少	予察灯(東彼町)による誘殺量は少なく、発生はやや少かった。	・昨年の発生が少なく、越冬量も少なかった	・合成ピレスロイド系剤等による防除
	チャノボリガ	やや早	やや多	発生は平年よりやや多であった。	・4~5月、7~9月の高温乾燥	

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	チャノキイロアザミウマ	やや早	並	6月上旬から発生が増加し、 平年並の発生である。	・5月下旬、7月上旬の少雨	
	カンザワハダニ	並	少	春先から発生は少なく、7月 中旬に増加したが、少ない発生 であった。	・昨年の発生が少なく、越冬量 も少なかった。	・ピラクトリス、ミルベメクソン、クロフェン ジン剤等による防除
	クワシロカイガラムシ	早	並	第1世代の発生は早く5月2 半旬から見られ、発生量は平 年並であった。	・3～4月の高温	・有機リン剤等による防除
冬春トマト (9年植付)	モザイク病	並	やや少	4月上旬から一部で発生を認 めた。		・土壌消毒 ・アブラムシ類の防除
	疫病	並	並	12月下旬から発生し、平年 並の発生であった。	・12月の高温、多雨	・フェルアマイド系剤等の防除
	葉かび病	やや早	やや多	11月下旬に発生し、3月下旬 に増加し、やや多の発生であ った。	・3月～4月の高温、4月の多 雨	・トリフルミゾール、チオファネートメチル、 TPN剤等による防除
	灰色かび病	並	やや多	1月下旬から発生し、3月下 旬に増加し、やや多の発生で あった。	・3月～4月の高温、4月の多 雨	・湿度管理 ・フロシドン、チオファネートメチル、シエ トフェンカルブ、フルジオキシニル剤による 防除
	アブラムシ類	並	やや少	全般にやや少の発生であ った。	・定植時のクロロコチル系剤施用 の増加	・コナジラミ類との同時防除
	コナジラミ類	並	並	11月上旬から発生し、やや 少～並で推移した。	・定植時のクロロコチル系剤施用 の増加	・イトフェンブロックス、ピリタベン、アプロ フェジン、イミダクロプリド剤等による 防除
冬春トマト (10年植付)	モザイク病	並	やや少	ほとんど発生しなかった。		・土壌消毒 ・アブラムシ類の防除
	疫病	並	並	12月中旬現在発生を認めな かった。		
	葉かび病	並	並	12月中旬一部で発生を認め た。		
	灰色かび病	並	やや少	12月中旬現在発生はやや少 ない。		・湿度管理 ・フロシドン、チオファネートメチル、シエ トフェンカルブ、フルジオキシニル剤による 防除
	アブラムシ類	並	やや少	全般にやや少の発生であ った。	・定植時のクロロコチル系剤施用 の増加	・コナジラミ類との同時防除
	コナジラミ類	並	やや多	11月中旬から発生し、12月中 旬現在やや多の発生である。		・イトフェンブロックス、ピリタベン、アプロ フェジン、イミダクロプリド剤等による 防除
冬春きゅうり (9年植付)	モザイク病	並	やや少	ほとんど発生しなかった。		・アブラムシ類の防除
	斑点細菌病	並	やや少	11月上旬、一部で発生した。		・銅剤等による防除
	べと病	並	並	11月上旬から発生し、1月下 旬に発生が増加したが、全般 には平年並であった。	・11～2月の高温、多雨	・湿度管理 ・マンゼブ、ホセチル、フェルアマイド系 剤等による防除
	褐斑病	並	並	11月上旬から発生し、全般 に平年並の発生であった。	・11～2月の高温、多雨	・べと病、灰色かび病等との同 時防除
	うどんこ病	並	並	11月上旬から発生し、11月 下旬の発生は平年よりやや多 かったが、その後は減少し全般 には平年並であった。	・11月の日照不足と高温	・DMI、TPN、炭酸水素カリウム、メ ハニピリム剤等による防除
	灰色かび病	並	やや多	12月中旬から5月下旬の収 穫終了まで発生した。12月下 旬から発生が増加し、その後は 並～やや多で推移した。	・12月～4月の高温、多雨	・湿度管理 ・被害果の除去 ・シエトフェンカルブ、フロシドン、メハニ ピリム、フルジオキシニル剤等による防 除
	菌核病	並	並	11月上旬から発生し、全般 に平年並の発生であった。	・11～2月の高温、多雨	・被害果の除去 ・灰色かび病との同時防除
	アブラムシ類	並	並	11月上旬から発生し、全般 に平年並の発生であった。		・定植時のクロロコチル系剤によ る防除
	ミナキイロアザミウマ	並	並	11月上旬から発生し、やや 少～並で推移した。		・定植時のクロロコチル系剤によ る防除
	コナジラミ類	並	並	11月上旬から発生し、やや 少～並で推移した。	・定植時のクロロコチル系剤施用 の増加	・アブラムシ類との同時防除
冬春きゅうり (10年植付)	モザイク病	並	やや少	ほとんど発生しなかった。		・アブラムシ類の防除
	斑点細菌病	並	やや少	ほとんど発生しなかった。		
	べと病	並	並	11月上旬から発生し、12月中 旬現在並の発生である。		
	褐斑病	並	並	11月上旬から発生し、全般 に平年並の発生であった。		・べと病、灰色かび病等との同 時防除
	うどんこ病	並	やや多	11月上旬から発生し、12月中 旬現在やや多の発生である。	11月～12月の高温	・DMI、TPN、炭酸水素カリウム、メ ハニピリム剤等による防除
	灰色かび病	並	やや少	ほとんど発生しなかった。		
	菌核病	並	やや少	ほとんど発生しなかった。		
	アブラムシ類	並	並	11月上旬から発生し、12 月中旬現在平年並の発生で あった。		・定植時のクロロコチル系剤によ る防除
	ミナキイロアザミウマ	並	並	11月上旬から発生し、12 月中旬現在平年並の発生で あった。		
	コナジラミ類	並	やや少	11月上旬から発生し、11 月中旬増加したが、12月に入 り減少し12月中旬現在やや少 の発生である。	11月～12月の高温	

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
春はくさい	根こぶ病	並	やや少	やや少の発生であった。		・TPN、フルアジナム、フルスルファミド 粉剤による防除
	コナガ	並	やや少	やや少の発生であった。		・IGR.BT、カルタフ、アセファート剤等 による防除
秋冬はくさい (9年植付)	モザイク病	並	並	11月下旬から発生を認めた。		・アブラムシ類の防除
	軟腐病	並	並	12月中旬から発生を認め、 平年並の発生であった。	・12月～1月の高温、多雨	・銅、オキソリニック剤による防除
	白斑病	やや遅	やや少	11月下旬から発生し、やや 少で推移した。		・TPN、キャブタン剤による防除
	べと病	並	並	12月中旬から発生を認め、 平年並で推移した。	・12月～1月の高温、多雨	11月～12月の高温
	黒斑病	並	やや少	ほとんど発生しなかった。		・白斑病との同時防除
	アブラムシ類	並	並	9月下旬から発生し、やや多 であったが、その後は減少し、 平年並で推移した。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	やや少	平年よりやや少で推移した。	・11月～1月の高温、多雨	・IGR.BT、カルタフ、アセファート剤等 による防除
	ヨウムシ類	並	並	11月下旬シロイチモジヨウ の発生がやや多であったが、 全般に並であった。		・コナガとの同時防除
秋冬はくさい (10年植付)	モザイク病	並	やや少	ほとんど発生しなかった。		・アブラムシ類の防除
	軟腐病	並	並	11月中旬から発生し、並の発 生であった。	11月～12月の高温	・銅、オキソリニック剤による防除
	白斑病	並	やや多	11月中旬から発生し、11月下 旬やや多となった。	11月～12月の高温	・TPN、キャブタン剤による防除
	べと病	並	やや多	11月中旬から発生し、11月下 旬やや多となった。	11月～12月の高温	・白斑病との同時防除
	黒斑病	並	並	全般に並の発生であった。		・白斑病との同時防除
	アブラムシ類	並	やや多	9月下旬から発生し、11月下 旬増加し、やや多の発生であ った。	11月～12月の高温	
	コナガ	並	少	9月下旬から発生し、並の発 生であったが、10月下旬から減 少し少発生であった。		・IGR.BT、カルタフ、アセファート剤等 による防除
	ヨウムシ類	並	並	11月下旬から発生し、並の発 生であった。		・コナガとの同時防除
冬キャベツ (9年植付)	黒腐病	並	やや少	やや少の発生であった。		・銅、オキソリニック剤による防除
	菌核病	やや遅	並	12月中旬から発生し、平年 並の発生であった。	・12月～1月の高温、多雨	・被害株の除去・ブロンミシ、イ ンダシオン剤等による防除
	アブラムシ類	並	並	9月下旬から発生を認め、平 年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	やや少	平年よりやや少で推移した。	・11月～1月の多雨	・IGR.BT、カルタフ、アセファート剤等 による防除
	ヨウムシ類	並	並	ハスモンヨウ・シロイチモジ ヨウを主体に発生し、平年並 であった。		・コナガとの同時防除
	モンシロチョウ	並	やや少	9月下旬から発生を認め、や や少で推移した。	・11月～1月の多雨	・コナガとの同時防除
冬キャベツ (10年植付)	黒腐病	並	やや少	やや少の発生であった。		・銅、オキソリニック剤による防除
	菌核病	やや遅	並	12月下旬発生し、並の発生で あった。		・被害株の除去・ブロンミシ、イ ンダシオン剤等による防除
	アブラムシ類	並	やや多	9月下旬から発生し、10月に 減少したが、その後増加しやや 多の発生であった。	12月の高温	・IGR.BT、カルタフ、アセファート剤等 による防除
	コナガ	並	やや少	やや少の発生であった。		・IGR.BT、カルタフ、アセファート剤等 による防除
	ヨウムシ類	並	やや多	ハスモンヨウ・シロイチモジ ヨウを主体に発生し、やや多 の発生であった。		・IGR.BT、カルタフ、アセファート剤等 による防除
	モンシロチョウ	並	並	平年並みの発生であった。		・コナガとの同時防除
たまねぎ (9年植付)	白色疫病	やや早	やや多	1月下旬から発生し、2月下 旬に発生が増加し、やや多で 推移した。	・1～2月の高温、多雨	・TPN、マンセブ、フェニルアミド系 剤による防除
	べと病	やや遅	やや少	やや少の発生であった。		・TPN、マンセブ、フェニルアミド系 剤による防除
	ホトリチス属菌による 葉枯症	並	やや多	1月下旬から発生し、収穫期 にかけて増加し、やや多の発 生であった。	・4月の高温、多雨	・べと病との同時防除
	ネギアザミウマ	並	やや多	11月下旬から発生し、1月下 旬から収穫期まで平年よりや や多の発生で推移した。	・1～4月の高温	・アセファート、合成ピレスロイド系剤 による防除
たまねぎ (10年植付)	白色疫病	並	並	12月中旬現在発生を認めな かった。		・TPN、マンセブ、フェニルアミド系 剤による防除
	べと病	並	並	12月中旬現在発生を認めな かった。		・TPN、マンセブ、フェニルアミド系 剤による防除
	ホトリチス属菌による 葉枯症	並	並	12月下旬一部で発生を認め た。		・べと病との同時防除
	ネギアザミウマ	並	並	11月下旬から発生し、12月中 旬現在並の発生であった。		・アセファート、合成ピレスロイド系剤 による防除
冬にんじん (9年播種)	黒葉枯病	遅	やや少	11月下旬から発生を認め、 やや少発生であった。		・ホリオキシ、イミクタジン酢酸塩剤 等による防除
	うどんこ病	並	やや多	10月から収穫期まで発生し、 11月下旬が最も多かった。	・10月～11月中旬の少雨	・ホリオキシ剤による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬にんじん (10年播種)	黒葉枯病	遅	やや少	12月中旬現在発生を認めなかった。		
	うどんこ病	並	並	10月下旬から収穫期まで発生したが、並の発生であった。		
冬レタス (9年植付)	斑点細菌病	並	並	11月中旬から発生を認め、平年並で推移した。	・11月～2月の高温、多雨	・銅、オキシニック剤による防除
	腐敗病	並	並	11月下旬から発生を認め、平年並で推移した。	・11月～2月の高温、多雨	・銅、オキシニック剤による防除
	灰色かび病	並	並	12月中旬から発生を認め、平年並で推移した。	・11月～2月の高温、多雨	・チオファネートメチル、イプロジオン剤による防除
	菌核病	並	やや多	10月下旬から発生し、やや多で推移した。	・11月～2月の高温、多雨	・チオファネートメチル、イプロジオン剤による防除
	ハスモンヨウ	並	並	9月下旬から発生を認め、平年並で推移した。		・アセフェート、ヘルマトリン剤等による防除
冬レタス (10年植付)	斑点細菌病	やや早	やや少	10月上旬に発生を認めたが、その後の発生はやや少なかった。		・銅、オキシニック剤による防除
	腐敗病	やや早	やや少	10月上旬に発生を認めたが、その後の発生はやや少なかった。		・銅、オキシニック剤による防除
	灰色かび病	遅	やや少	発生はやや少なかった。		・チオファネートメチル、イプロジオン剤による防除
	菌核病	やや早	並	11月下旬から発生し、並の発生であった。		・チオファネートメチル、イプロジオン剤による防除
	ハスモンヨウ	並	やや多	9月下旬から発生を認め、11月までやや多で推移し、その後減少した。		・アセフェート、ヘルマトリン剤等による防除
いちご (9年植付)	炭疽病	やや早	やや多	<i>Glomerella cingulata</i> による炭疽病は平年並の5月下旬から発生を認め、発生量も平年並で推移したが、8月中旬以降発生が増加し、8月下旬は平年よりやや多の発生であった。定植後は10～12月にかけて衰ちよう枯死株が発生したが、平年並であった。		
	萎黄病	やや遅	やや少	8月下旬、一部で発生を認めたが、全般にはやや少の発生であった。		・発病株の除去 ・土壌消毒
	うどんこ病	並	並	育苗期は5月上旬から発生し、6月上旬最も多発生したがその後減少し、平年並に推移した。定植後は10月上旬から発生し、11月下旬に増加したが、その後は平年並に推移した。	・主要品種、とよのかが本病に 対して弱い ・5月～6月の発病適温 ・11月の高温	古葉の摘葉 ・被害果の除去 ・DM、炭酸水素ナトリウム、ホリオリシン、 メバニヒリウム剤等による防除
	灰色かび病	並	やや多	12月中旬から発生が増加し、2月下旬までやや多の発生であった。	・12月～2月の多雨	・湿度管理 ・イプロジオン、ビシクロゾリン、プロシミ ン、メバニヒリウム剤等による防除
	アブラムシ類	並	並	育苗期から収穫終了までの生育期間を通して発生した。育苗期は8月下旬から増加したが、定植後は平年並で推移した。	・12月～2月の高温	・フルハリアート、ピリダベン、DDVP、 アセチアリド 剤等による防除
	ハダニ類	並	やや多	生育期間を通して発生し、育苗期は8月下旬に発生が増加した。定植後は12月中旬以降発生が増加し、やや多で推移した。	・12月～2月の高温	・ヘキシチアゾクス、テフフェントラト 剤等 による防除
	ハスモンヨウ	並	やや多	6月上旬から発生が認められた。8月下旬以降発生が増加し、本圃定植後も11月下旬までやや多で推移した。	・8月下旬～10月の高温、少雨	・IGR剤等による散布 ・フェロモントラップによる大量 誘殺
いちご (10年植付)	炭疽病	やや早	やや多	・育苗期の <i>Glomerella cingulata</i> による炭疽病は、平年並の5月下旬から発生を認め、発生量も平年並で推移したが、8月上旬以降発生が増加し、8月下旬は平年よりやや多の発生であった。 ・ <i>Colletotrichum acutatum</i> による炭疽病は、平年より早く4月中旬から発生し、5月上旬には一部で多発圃場が見られた。その後もやや多で推移した。新たに吉井町、西海町、佐世保市、北有馬町、西有家町で発生が確認され、発生地域が拡大し、これまでに4市12町で発生を確認した。 ・11月上旬、本圃の果実(幼果を含む)において炭疽病菌による果実腐敗が認められた。	・伝染源の増加 ・4月の高温、多雨 ・5月～6月の多雨 ・夏季の高温	・発病株の除去 ・雨よけ育苗 ・全面マルチ被覆 ・プロピネブ、ジチアノ、有機銅、マン ゼブ、アスキシトロン剤等による 防除 ・土壌消毒

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	萎黄病	並	やや多	8月上旬から発生を認め、やや多の発生であった。	・夏季の高温	・発病株の除去 ・土壌消毒
	うどんこ病	並	並	育苗期は5月上旬から発生し、6月下旬に多発したが、その後減少し、平年並に推移した。本圃では10月まで発生が少なく、11月下旬から果実の発生が増加したが、発生量は並であった。	・6月の発病適温	・古葉の摘葉・被害果の除去 ・DMI、炭酸水素カリウム、ホリオリキン、メバニピリム、マシン油剤等による防除
	アブラムシ類	並	並	育苗期から平年並で推移した。		・フルバリネット、ビリダベン、アセタミプリド剤等による防除
	ハダニ類	並	並	育苗期から平年並で推移した。		・フェニトラト、ヘキシチアゾックス、クロルフェニル剤等による防除
	ハスモンヨウ	並	多	5月下旬から食害が認められた。8月上旬以降発生が増加し、10月に最盛期となった。	・夏季の高温、少雨	・IGR剤、BT剤等による防除 ・フェロモントラップによる大量誘殺
つつじ類	褐斑病	春：早 秋：並	春：多 秋：やや多	春：新葉での発生開始は5月上旬(平年5月下旬)と早く、その後急増し、6月上旬に発生最盛期になり、多発した。その後気温の上昇とともに発生は減少し、7月下旬終息した。 秋：8月下旬から発生し始め、12月まで病勢の進展は緩やかであったが、12月下旬から急増し、最終的にはやや多の発生となった。	春：4月～5月の気温が高く推移したことから新梢展開期が早かった。 4～5月の多雨 秋：9月～10月の高温	・ボルドー液による防除
	ツツジゲンハイ	やや早	やや多	第一世代成虫は5月中旬やや早かった。発生量は、7月下旬まで平年並みであったが8月上旬に増加し、やや多発生となった。	4月～8月の高温	・エチルチオマトン剤、アセファート剤による防除